

行基と地形と水利

ふちんかん

我々の取材を先回りするようにあちこちに出現する行基（像）。今回も御願塚古墳前で待ち構えていた。行基は奈良時代に近畿圏を中心に活躍した僧で、福祉活動と同時に、ため池や掘削や架橋事業をセットにしたのが民衆に大ヒット。当時は、僧が勝手に布教活動に出歩くことは認められておらず、違法宗教活動だったわけだが、これらの治水事業の功績は捨てがたく、政権側も見て見ぬ振りの状態だったが、違法ながらも行基は民衆の要請に応え、治水事業を行い続けた。これが後にあちこちに像が創られることになった原因である。

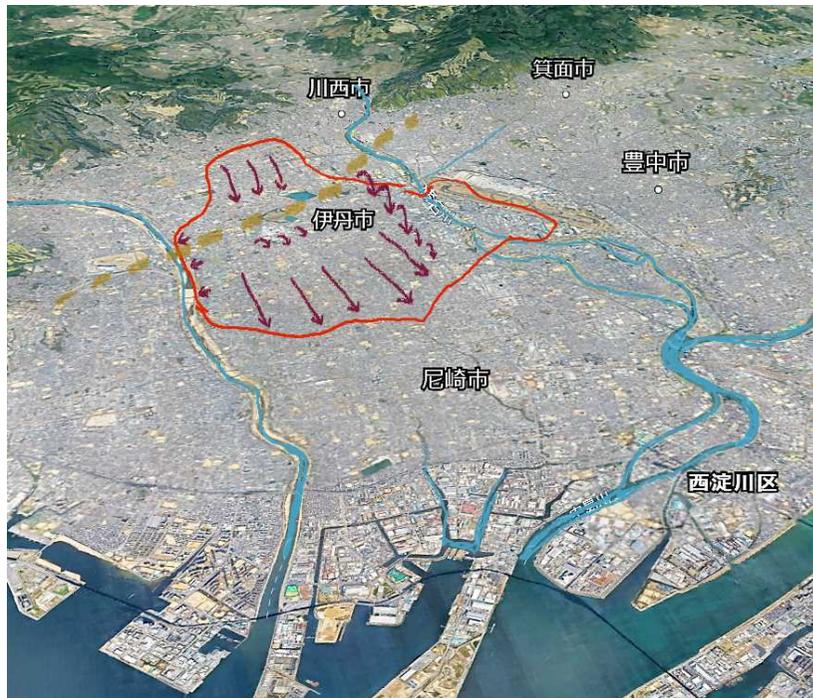
つまり現在、行基（像）があるところは、何らかの水問題が解決された場所ということだ。

『行基行くところに治水あり。』今回の取材地である伊丹市も、行基プロデュースといわれる昆陽池や、行基町という地名がある。

さて、ここでは伊丹市の地形と水利について書いてみたい。



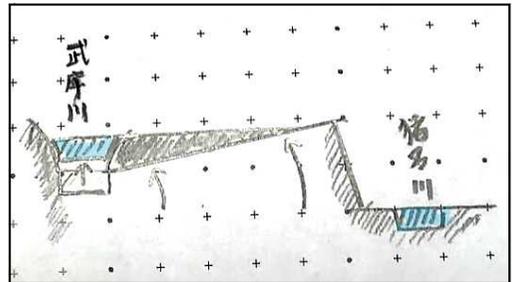
まず伊丹市全体の地形だが、基本的に平坦である。北の山手から南の大阪湾に向かって、なだらかには傾いているが、南北6.5 kmに対して高低差40 mなのでほとんど傾斜は感じない。西に武庫川、東に猪名川が流れているので、中州のような位置関係から地図的には低地のように見えてしまうが、実際は台地状になっている。



阪急電鉄 伊丹線

次にこの台地の成因であるが、12万年前（ヒトの祖先が火を使い始めた頃）はこの地は浅い海であった。そこに2つの河川（現在の天王寺川と天神川）から土砂が運搬され堆積していった。これが現在の伊丹台地の基盤である。その後、地球の冷涼化で海岸線が下がったこと、またこの地域が隆起したこと、この2つから堆積した基盤が陸化して現在の台地が形成された。このときの隆起は、西側より東側が大きい傾動隆起であったため、現在でも台地の東側と猪名川の間には大きな崖がある。現在、伊丹市の東端を南北に走る産業道路沿いに、緑地帯が続いているが、それがこの崖である。

この台地の西への傾きのため、先の2つの川は両方とも武庫川に注いでいる。ちなみに、その後、西側の武庫川は自身と六甲側の支流からの土砂の堆積で、かなり標高が上がり、伊丹台地の傾動を打ち消している。つまり伊丹台地の表層は、現在は東西方向にはほぼ水平になっていて、西側は、気が付けば武庫川といった感じになっている。東側が崖になっているのと対照的である。



いずれにしても伊丹の市域の大部分は台地上にあり、水はけがよく、農耕には不向きな土地であった。逆に伏流水として井戸水が利用できたはずであり、後の酒造りには有利に働いたのかも知れない。尼崎に接する南部は、武庫川と猪名川の氾濫原となり、これまた農耕には不向きな場所であった。百人一首でも読まれている「猪名の笹原」とはこのあたりのことを指す。笹が生い茂るといふことは、つまり農耕には使いにくい土地ということである。

今回の取材のスタートである塚口駅からゴールである伊丹駅への道は、南の氾濫原から台地（の南端）への旅であった。ただ、距離3.1 kmに対し高低差10 mなので、気づかない程度のわずかな上りである。

さて、行基プロデュースの昆陽池は、この台地を東西に走る断層による低地（地溝帯）に作られており、年間を通して水の確保する役割を担っていた。

今回、伊丹線に沿って北上する際に、小さな水路や用水施設に出会った。これらが昆陽池と直接関係があるかどうかは寡聞にして知らなかったのだが、どうやら江戸時代に灌漑のため、昆陽池とともに武庫川から取水した水も含めて、伊丹市西部～南部へ通す用水（昆陽井：こやゆ）が建設されたい。この名残が現在でも各地に残っているということだ。

ということで、この水路もやはり行基がらみだったということだ。

（おわり）



がんばれ盲腸線

